

# 子育て環境に関する母親の パーソナルネットワークの機能

—サポート資源と準拠枠—

Functions of Mothers' Personal Network concerning Parenting Environment:  
Support Resources and Frame of Reference

荒 牧 草 平  
ARAMAKI Sohei

**【要旨】** 現代社会では、主に母親が子育て環境をコーディネートしていると指摘されている。それには、母親自身の資質や社会的地位に加えて、パーソナルネットワークも関与している。ネットワークは様々なサポートを提供するとともに、教育態度を決定する際の準拠枠ともなるからだ。そこで小中学生の母親を対象とした調査データを用いて、パーソナルネットワークがもたらすサポートおよび準拠枠としての機能について検討した。

主な知見は以下の通りである。1) 人手や経済面の支援は主に親族による。2) 相談相手としては非親族が重要な役割を果たしている。3) 非親族と公的機関に対して相対的に強い支援ニーズがある。4) 居住距離が近い者を参考にするわけではない（非親族の場合はむしろ遠くに住む者を参考にする）。5) 非選択的關係である親族の場合は、よく話す相手や支援の提供者を参考にする。6) 非親族の場合は会話頻度にかかわらず参考にする。7) 親族の場合は相手の考え方や属性を同様に参考にするが、非親族の場合は特に考え方を参考にする。

従来の研究は、手のかかる育児期の子育てと母親の就労に焦点をあて、ネットワークのサポート機能を中心に検討してきた。しかし、子どもの成長に伴い人手のサポートが必要なくなったとしても、各時期の発達課題に対して相談相手や準拠枠が求められ、しかもそれらの重要性は子どもの成長とともに次第に高まってくるとも考えられる。今後は、ネットワークの準拠枠機能に関しても、より一層の研究が望まれる。

## 1. 子育て環境とパーソナルネットワーク

かつては地域共同体が担っていた次世代の養育は、近代化以降、しだいに母親がわが子を育てることとみなされるようになっていった。ただし、母親たちは必ずしも孤立して子育てを行ってきたわけではなく、家事使用人・自分のキョウダイ・子育て仲間と、時代により支援者は入れ替わっても、何らかの形で周囲から支えられてきたと指摘されている（落合 1989；松田 2008）<sup>1)</sup>。

渡辺（1994）は、前近代社会と近代社会における「育児構造」の違いを、図1の類型を用いて論じている。類型1の前近代社会では、家族と社会の境界は曖昧で、子どもは親族ネットワークや地域コミュニティと直接に関わっていた。そうした社会では、小さな子どもが1人でいても安全で、食べ物や昼寝場所も容易に手に入り、誰かが遊び相手になり、けがの手当もしてくれた。そのため、親は子どもに付きっきりでいる必要はなく、安心して農作業などに出かけることができた。ところが、近代以降の類型2の社会においては、核家族の内外を分ける境界は明確で、親（母親）が単一の育児の担い手とされている。核家族外の様々な主体による育児作用は、ゲートキーパー

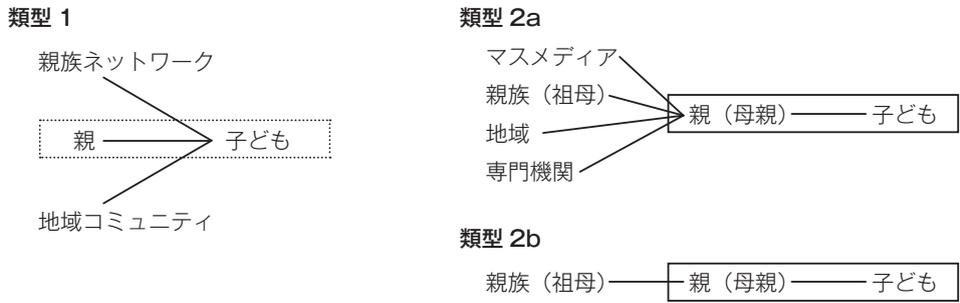


図1 育児構造  
注：渡辺（1994）の図1より作成

である親（母親）のスクリーニングを経て間接的に子どもに達することになる。

言い換えるなら、類型2の社会においては、核家族と外部の育児主体を仲立ちする親（母親）がコーディネイターとなって子育て環境を作り上げているのである。そのため、親が望まないような外部の接触を排除できる（「甘い物ばかり与えるおばあちゃんを遠ざける」「有害なTVを見せない」など）反面、自ら働きかけなければサポートを得ることは難しい。その結果、親と外部の主体との結びつきが多面的・複合的な場合もあれば（類型2a）、限定的・単線的な場合もあり得る（類型2b）。つまり、類型2の社会では、外部の育児主体と親がどのような関係を取り結ぶかが、子育て環境を左右することになる。

とはいえ、どのような子育て環境を構築できるかは、コーディネイターとしての親のスキルや性格特性のみによって規定されるわけではない。当然、周囲にどのような育児主体が存在し、どのような育児資源や育児機会にアクセスし得るかにも依存する。つまり、子育て環境は、親自身の社会階層的な位置づけや、居住地域の諸条件によって制約を受ける中で、親（母親）がどのように外部の育児主体と関係を取り結ぶかに依存する。そのため、母親がどのようなパーソナルネットワークを築いているかや、それがどのように機能しているかが重大な関心事となる。

ところで、現代の日本社会では、子育ての負担が母親に過度に集中していることが問題視されており、その改善の糸口を探る目的から、多くの先行研究が、「母親」のネットワークを対象としてきたのであった（落合 1989；渡辺 1994；久保 2001；前田 2004；松田 2008など）。本稿も、これと同様の立場から母親に焦点をあてて論じていくこととする。

## 2. パーソナルネットワークの機能

### 2.1 規範的制約とサポート資源

パーソナルネットワークが人々の意識や行動に影響を与える働きは、従来、メンバーがもたらす「資源」と規範的「制約」の2側面から検討されてきた（大谷 1995など）。

たとえば、ネットワーク研究の古典とされるボット（Bott 1955=2006）が着目したのは、密度の高い緊密なネットワークがもたらす規範的な制約の効果であった。様々なデータを組み合わせた分析からボットが導き出したのは、密度の高い緊密なネットワークでは、メンバーが常に接触を保つために規範的な合意が成立しやすいが、緩やかなネットワークでは一貫した規範が生まれにくいという点であった。また、野沢（1995）は、ネットワークがもたらす規範的制約を「磁場」

という概念で論じている。磁場とは、連帯性の強いネットワークが個人を一定の行動に向かわせるような規範的な力を帯びた状態を指す。野沢は伝統的な山形市では地縁の親族ネットワークの磁場が、都市郊外の朝霞市では夫にとっての職場ネットワークと妻にとっての近隣ネットワークがそれぞれ磁場を発生し、夫婦関係を構造的に規定することを指摘した。

他方、日本の家族社会学者が主に着目してきたのは、サポート資源としてのネットワークであった。その1つの源流となったのが、パーソンズによる核家族の孤立論への反証として提出されたリトワク (Litwak 1960) の「修正拡大家族論」<sup>2)</sup>である。また、その後のアメリカの親族ネットワーク研究では、産業社会における親族関係は核家族が機能する上で重要な資源であるとの理解が広まり、それが日本の家族社会学にも影響を及ぼした (目黒 1988)。こうした流れを受けて、日本の家族社会学にネットワーク概念を導入した目黒 (1980) の先駆的研究が着目したのも、危機的状態にある家族に対する、サポート基盤としてのネットワークであった。

ただし、ネットワークは単に支援を与えてくれるだけの存在ではない。第1の注意点は、ネットワークが負の効果をもたらし得るということだ。育児に関するサポートネットワークの研究では、近隣で形成される育児仲間が、特に密度の高い場合、サポート資源を提供する一方で、心理的な負担やストレーンをもたらすと報告されている (前田 2004; 松田 2008)。また、前田 (2008) は、地方都市においては、育児仲間だけでなく育児と関連しない者 (幼なじみや学生時代の友人など) も含めた重層的なネットワークが構成され得るものの、ネットワークが比較的狭い地域内に集積しているため、ストレーンも引き起こしやすいと指摘している。他方、石田 (2006) が指摘したのは、関係の選択性という問題である。親族や職場の同僚などは、諸個人の意思にかかわらず関係が継続する「非選択的關係」と呼ぶことができるが、石田が指摘したのは、彼らとの関係の悪さが満足度に負の効果をもたらす点であった。結局、地理的に近接し接触頻度の高い、いわば逃げ場のないネットワークでは、サポートとストレスが表裏をなしているということだろう。

もう1つの注意点は、第1節でも指摘したように、誰もが社会空間の中に位置づいている以上、自らの階層的な位置づけや居住地域の影響から自由ではあり得ないという点である。先述の松田 (2008) は、母親の年齢が高かったり、フルタイム就業や自営業であったり、世帯収入が低い (400万円未満) 場合にはネットワークの規模が小さくなり、逆に、地域に6歳未満の子どものいる世帯数が多く、居住年数が長いほど規模が大きくなること等を明らかにしている。また、大和 (2000) は、通常ネットワーク研究が対象としてきた「交際のネットワーク (社交・相談・軽い実際の援助)」と「(身体的) ケアのネットワーク」を区別しながら、ネットワーク構成の多様性について検討を行い、前者の場合は男女とも、後者の場合も女性においては、階層が高いほどネットワーク構成が多様であることを明らかにしている<sup>3)</sup>。

ただし、サポートネットワークと階層的地位の関連を検討した星 (2011) は、両者が直接的な関連をもたないことを指摘している。星は、第4回全国家庭動向調査データを用いて分析を行い、階層的地位は子育てに関する規範意識を媒介して、サポートネットワークの利用に影響すると指摘している。すなわち、妻の学歴と就業、夫の収入は、「母親は子育てに専念すべき」という規範意識を弱め、そのことが相談相手として友人などを求めることや、子どもの世話を公的機関に頼ることを促進するという。

## 2.2 準拠枠としてのネットワーク

ところで、ネットワークが制約をもたらすと考える場合も、サポート資源を与えてくれるとみられる場合も、ネットワークの効果は周囲のメンバーの側からegoへもたらされるものと想定されている(図2a)。しかし、ネットワークメンバーは、egoの外側から制約や資源をもたらすだけの存在ではないだろう。たとえば、子育ての方針や教育態度を決定する際、親(ego)がメンバーを準拠枠とすることもあってはならないだろうか(図2b)。つまり、親は外部社会につながるゲートを守るだけでなく、ゲートの位置から周囲の人々を参照し、子どもに対する教育態度を決定している面もあると考えられる。後者のような見方を以後、参照論と呼ぶことにしよう。

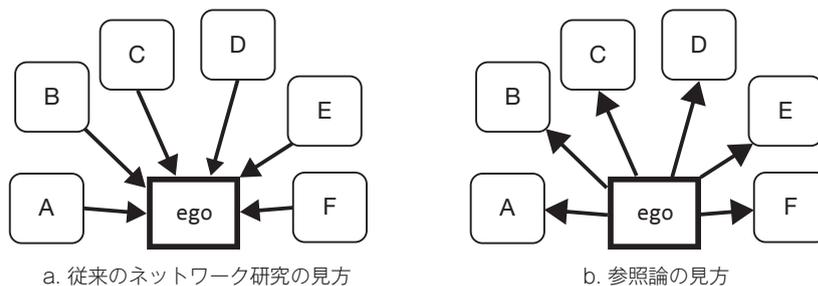


図2 ネットワークの機能と効果

これに関連して荒牧(2018a)は、小中学生の子どもを持つ母親の教育期待が、ネットワークメンバーの学歴や高学歴志向と関連すること、しかも学歴の高い親ほど周囲の高学歴志向の影響を強く受けることなどを明らかにしている。この結果は、子どもに対する教育期待を形成する際に、母親が周囲の学歴や高学歴志向を準拠枠としていることを示唆する。そこで、実際に誰が誰を参照しているのかを調べたところ、本人の学歴が高いほど、また、学歴の高い相手のことほど参考にする傾向のあることがわかった(荒牧2018b)。これらの結果は、母親が準拠枠とすべき相手を選択し、その地位や考え方などを参考にして、自らの教育態度を決定しているという参照論の見方を支持する。

以上のような問題意識から、本稿では、1) 実際に母親がネットワークメンバーから得た子育てに対する様々なサポートの状況とサポートに対するニーズ、および2) 母親がどのメンバーのどの側面を準拠枠とするのかという観点から、パーソナルネットワークの機能について理解を深めることを課題とする。

## 3. データ

分析に用いるのは、以下の3段階を経て収集されたデータである。第1次調査は、2016年10～12月にかけて、小中学生の子どもを持つ母親を対象に実施された質問紙調査になる(306票の回収(回収率53.0%)。詳細は、昨年の紀要(荒牧2018b)を参照されたい。

第1次調査では、後日行う予定のインタビュー調査への協力を依頼した。すると、予想に反して71名と多くの方から協力の申出が得られたため、インタビュー調査は現実的ではないと判断し、

2017年1～2月に追加の探索的な質問紙調査を行った（54票の回収）。この第2次調査では、サポートの状況やニーズ、子育ての苦勞等について詳細な状況をたずねている。その分析結果をふまえて、2018年5～6月に第3次調査（WEB調査）を行った。対象者は、第1次調査への回答者のうち、2017年の第2次調査に回答していない252名である（143件の回収）。

本稿では、このうち主に第2次調査と第3次調査への回答（合計193件）を用いて分析を行う<sup>4)</sup>。上記のような手続きを経ているため、通常は無作為抽出法による調査と比較すると、回答者の偏りが大きいことが危惧される<sup>5)</sup>。また、2つの調査で同様の内容を質問していても調査モードが異なるという問題がある。したがって、同じ形で質問しているものについては、調査モードによる違いがないかどうかを確認しつつ合算した結果を報告することとし、質問方法が異なるものについては、それぞれの結果を示すこととしたい。

## 4. 子育てへのサポート

### 4.1 様々な支援の状況

本節では、ネットワークメンバーからのサポート状況について確認してみたい。図3は「子どもの世話」「家事支援」「経済的支援」「悩みの相談」のそれぞれについて、支援があったかどうかを支援者の区分ごとに集計した結果である。なお、第2次調査では非親族については自由記述式で回答してもらった結果をアフターコードしている<sup>6)</sup>。また、「悩みの相談」は第2次調査ではたずねていなかったため、第3次調査のみの集計になる。

結果は図3に示した。親族からは、自分の「親」を中心に多面的な支援がある一方で、非親族からの支援は情緒面（子育ての悩みの相談相手）に偏っており、2割ほどが子どもの世話を受けたことを除くと、他の実利的な支援は皆無に等しい。調査の時期も対象や方法も異なるが、自分の親から多面的な支援を受けている点や、非親族からは情緒的支援が中心になる点は、落合（1989）や久保（2001）でも共通して指摘されている。

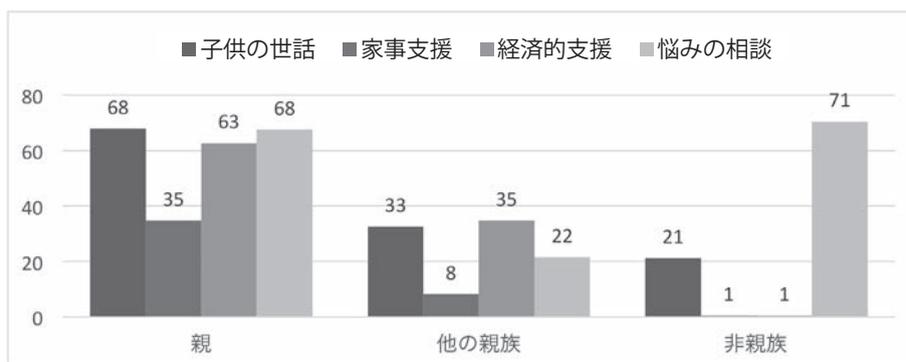


図3 支援者別にみた支援内容

第2次調査では、親族からの実利的支援に限られるが、子どもの年齢（第1子の年齢）に応じて支援状況がどう変化したかをたずねている。その結果、1)「子どもの世話」と「家事<sup>7)</sup>」については、全体を通じて自分の親からの支援が大半を占めるが、子どもの年齢とともに支援を受ける割合が低下していること、2)「経済的支援」に関しては、自分の親と夫の親からの支援が同程度で、

子どもの成長によっても支援を受ける割合には変化のないことがわかった(図4)。

ところで、図3と図4の値が異なるのは、図3は過去に一度でも支援を受けた経験の有無であるのに対し、図4が各時期の状況だからであろう。特に自分の親でズレが大きいのは、親の場合、少なくとも一度は支援を受けたが必ずしも期間を通じての支援ではなかった、というケースが多いと考えられる。自分の親が支援の中心であることは先行研究で繰り返し報告されているが、支援を受けた期間や頻度についても、詳しく調べてみる必要があるようだ。

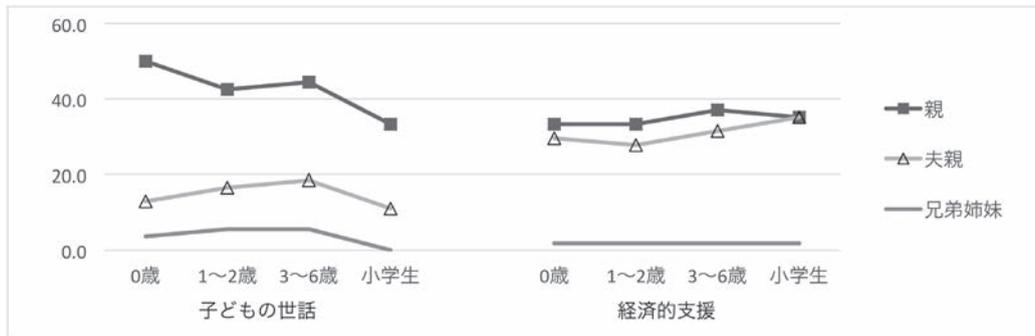


図4 子どもの成長段階に応じた支援状況の変化

## 4.2 相談相手と相談内容

次に、誰にどんな相談をしたのか見てみよう。図5は、子どもの「成長や性格」「習い事(勉強以外)」「成績・塾・受験」「友達関係や学校」の4項目について、よく相談する相手を回答してもらった結果になる<sup>8)</sup>。なお、第2次調査では、メディア(「本や雑誌」「インターネット」)の情報を利用するかどうかもたずねているので、その結果も合わせて示している。

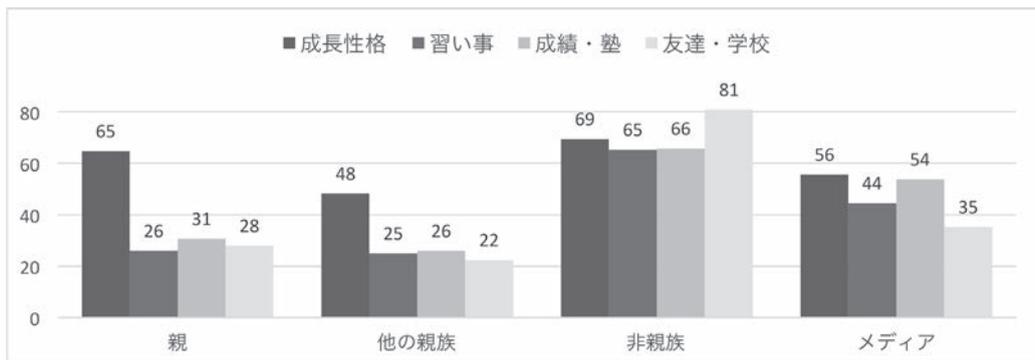


図5 相談相手別にみた相談内容

図5より、全体に非親族を頼る傾向が強い中で、子どもの発達に関してのみ、親族に相談する割合も高くなっていることがわかる。言い換えるなら、子どもの教育や友だちづきあいなどに関しては、親族は非親族ほど頼りにされていない。その点では、自分の親も他の親族もあまり違いはない。子どもの教育に関する相談は、情報の共有という側面が強いため、自分と同じように子

育てをしている、主に同世代の子育て仲間が頼りにされているのであろう。また、これら3項目に関しては、親族よりもメディアが頼りにされていることも興味深い。

### 4.3 支援してもらいたかったこと

これまでの分析から、落合(1989)や松田(2008)の指摘したように、多くの母親たちは孤立しているわけではなく、様々な形で周囲からサポートを受けていることがわかる。ただし、必ずしも十分な支援が得られているとは認識していない可能性もある。そこで、第2次調査では、「実際には受けられなかったが支援してもらいたかったこと」について、「いつ」「誰に」「どんな」支援を受けたかたかを、自由記述で回答してもらった。その結果、支援を求める時期は主に子どもが乳幼児の時期であること、子どもが病気の時に支援が欲しかったという声や、公的機関に経済的支援を望む者も少なくないことがわかった。

これらの結果をふまえて第3次調査を行った結果が図6になる。ここから、親族にはどの項目にも支援を求める者が一定の割合(1~2割)で存在する一方、非親族には主に「悩みの相談」を求めていることがわかる。政策的に重要なのは、「家事支援」をのぞくすべての項目で、公的機関への支援を望む割合が相対的に高いことである。特に「悩みの相談」と「病児保育」に関しては全体の3分の1が支援を望んでいる。日本では、子育てに対する公的支援が不足していると指摘されるが、その結果が明確に表れていると言えるだろう。

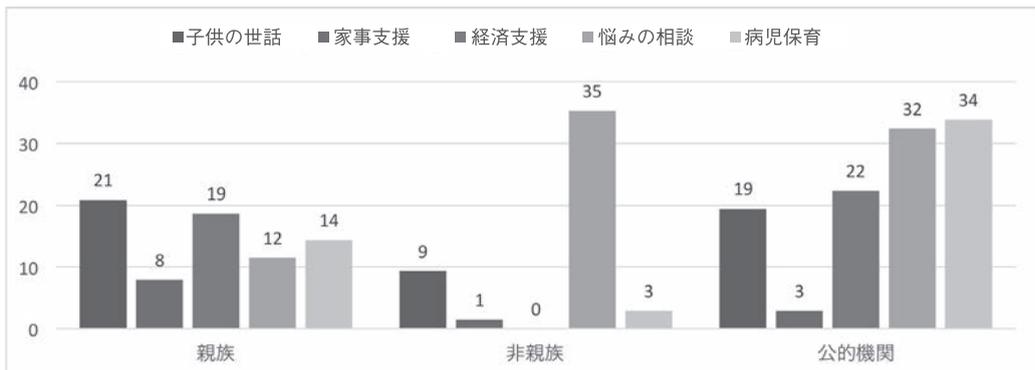


図6 支援者別にみた「支援してもらいたかったこと」

その上で興味深いのは、非親族に対する相談ニーズの高さである。図5に示した通り、非親族には既に様々な事柄を相談する者が6~8割に達していたにもかかわらず、さらに相談面でのニーズを持つ者が35%にも達しているのである。このように非親族に対して、情緒的な面での支援を強く望んでいるという分析結果は、「相談」以外の場面においても、非親族を心理的に頼る傾向が強いことをうかがわせる。これは、「人手」や「経済」面の支援で、主に親族を頼りにしていたことと対照的である。

### 4.4 サポートの不足と子育ての苦勞

子育てにおけるサポートの不足は、子育ての苦勞をたずねた質問からも読み取れる。第2次調査では、「子育てで特に苦勞したこと」について自由記述式で回答してもらった。ここでは、特に

回答の多かった「相談面での支援不足」と「人手の不足」を訴える回答から一部を紹介する<sup>9)</sup>。これらの記述からは、子育てに対するサポートの必要性がひしひしと伝わってくる。

### 相談面での支援不足

子どもが人間関係でうまくいかない時。仲の良い友だちができずグループわけなどでいつもあぶれてしまう。宿題をする、提出物を出す、などの基本的なことができない。出かける直前にも提出物を出すよう声をかけても10分後にはもう忘れていて、誰に相談して良いかわからない。

苦労しなかったところはない。何もかも大変だった。一番苦労したのは、子供の得意なところと不得意なところを見極めて、不得意なところをどういう支援をしたらよいか考えたこと。発達が少し遅れ気味で、まわりの子供たちといっしょにあそぶことがなく、どちらかというとなんか変わり者のように思われてしまうので、ママ友もいなかった。子供を見ていてもよくわかりにくく、ママ友からの情報もないので、孤独さも感じながらどうしたらみんなといっしょに遊べるようになるかをいつも模索していたと思います。

兄弟の歳が近かったので、長男が小1～小3までは、とにかく、毎日叱りっぱなしでした。家の中が猿山状態で私の言う事を聞かず、やりたい放題の子供たちに、半ノイローゼになっていました。パートの仕事を週2で始め出した頃でもあり、子育てと仕事にとっても疲れていました。

1人目の時、育児書等を読んでドキドキしながら自信なく子育てをしていた様に思います。その時は無我夢中だったので苦労したとは思っていなかったが、今思えば、子供が病気になった時、どうして良いかわからず、とにかく育児書を読むが参考にならず、とにかく、どうしよう!! どうしよう!!とパニックになっていました。2人目が増えると、大変さは増しますが、心に余裕がありました。しかし、病気の子と元気な子と2人をかかえて、病院へ行ったりするのは本当に大変でした。

最初の子の時は何事も初でよく分からず、親もアテにできなかったし自分も若かったので「こうでなければいけない!」と型にはめて考えたりしてしまい、子供は辛かったと思う。ゆとりがなかったというか。親の心にゆとりがないと親子ともに苦しい(後略)。

反抗期や思春期の際、衝突したり口論したりすることがあり、向き合うことに疲れ、あきらめてしまおうと思ったことが多々あった。その際ママ友に「状況が悪くなった時、どうしようもなくなった時にどうするか、その時その人間の真価が初めて問われる」と言われて、奮い立った記憶があります。子どもと向き合うこと、自分の置かれている状況、立場から目をそらさないこと、迷ったらだめなんだと自分と子どもに言い聞かせることが辛かった。自分の言動が間違っているかもしれないと思う時があり、子どもに向き合えない時が辛かった。

### 人手の不足

仕事との両立が難しかった。子どもはかわいい。でも仕事はしっかりやりたい。きちんとやりたい。子どもが病気になると自分が仕事しているせいでは、と悩んだ。

現在1人で子育てをしている中で、経済を1人でまかなうと、仕事に時間をとられ、結果子供が寂しい思いから、親の目の届かない所で横道にそれてしまう行動をとられた所。本末転倒だと思っても、やはり将来に向けて経済を作るのは必須なので、とても心苦しいです。

上と下が年の差があるため行動が異なり反抗期の中学生の悩みや子育ての支えのない夫に、一人で育てている孤独感を感じました。

自分の体調が悪い時に頼れず、子供の習い事を休ませた。子供の進路について、納得がきちんと行く事が少なかった。親は自分の主観を押しつけるのでかえってストレス。子育てにストレスや疲れを感じても相談相手がいなかった。ママ友は、遊ばせたりランチなど精力的に動くので、気晴らし反面ストレスとなり疲れる。

第2子を出産したあと、1才差で産んだこともあり日常生活をこなしていくのが精一杯で、夕方から夜にかけて忙しい時間に2人同時に泣かれると自分も泣きたい気持ちになっていた。第2子が1～2才頃の買い物も大変だった。上の子もまだ話を理解するには難しい時期(3～4才頃)だったので、1人が右へ行きもう1人が左へ行くというようなことも多々ありました。

夫婦で話し合いが出来なかった事です(ほぼ丸投げ)。仕事が忙しい時は仕方なく思えましたが、ヒマになっても病気の事、しつけ、進学、全てにおいて相談できなかった。

主人の帰りが遅く実家も遠方の為、子供と2人で過ごす時間が多かったせいか、私以外の人にあまりなつかず、私の姿が見えないと大泣きしていた。歯科や美容院などに行けなかった。

第一子の時も第二子の時も産後の家事支援を受けずに夫婦で無理をしてしまいました。第一子も第二子も泣きやすく甘えん坊で、幼稚園入園に際しても母子分離がなかなかできず、母親として情けなくなった。(他のお子さん方は皆笑顔でママに「行ってきます」ができるのに、なぜうちの子だけ…と、他者と比べて悲しくなりました。)

相談面での支援不足には、子どもへの接し方や子どもの発達に関する知識不足に言及している例も多い。専門家による相談サービスが有効に働く可能性が指摘できる。人手不足への対応と合わせて、公的支援の整備が望まれる。なお、人手不足に関する回答の中には、周囲からの理解不足に触れている者もあり、家族との子育て方針の違いに苦労したという例もみられた<sup>10)</sup>。また、ネットワークには負の側面もある(前田 2004, 2008)。したがって、単に人手の支援をすれば十分だとは言えない。落合(1989)や前田(2004)が指摘しているように、育児に対する直接的なサポートだけでなく、親役割から一時的に解放されるような機会を提供することも重要なかもしれない。

## 5. 進路選択の準拠枠

前節の結果から特に興味深いのは、既に多くの者が非親族に悩みを「相談」しているにもかかわらず、さらに非親族への相談を求める者が多いことである。これらの結果は、ネットワークの参照機能においても、非親族が重要性を持つことを示唆する。以下、子どもの進路を考える際に焦点を絞って、誰が誰を、また、どのような側面を参考にするのか検討してみたい。

### 5.1 誰が誰を参考にするか

どのような属性の母親が、どのような属性のメンバーを参考にするのかについては、先述の通り荒牧(2018b)で検討を行い、主に以下の知見を得ている。1) 親族よりも非親族を参考にする。2) 本人の学歴が高い者ほど、相手のことを参考にする(職業や世帯収入は関係しない)。3) 相手の学歴が高いほど、参考にする相手として選ばれやすい。

これらの結果は、参考にする相手とは、単に自分の身近な存在というだけでなく、主に学歴を基準として、自ら選んだ相手であることを示唆する。

## 5.2 誰の何を頼りにするか

このことを詳しく検討するため、相手に会うまでにかかる時間、会話頻度（電話やSNSなどを含めて話をする頻度）、支援の授受状況によって、どのような違いがあるのかを調べてみた。なお、これらの質問は第1次調査に含まれていたため、分析にも第1次調査に回答した全ケースを用いている。

その結果、まず、相手に会うまでにかかる時間は、親族の場合は全く関連が認められないこと、また、非親族の場合はむしろ遠くに住む者を参考に行っていること（近くに住む場合の32.3%に対し、遠くに住む場合は48.5%であった）がわかった。ここから、予想通り、単にふだん近くにいる者を参考に行っているわけでない結論づけてよいだろう。

次に会話頻度との関連を調べた結果が図7である。ここから、親族の場合はよく話す相手のことほど参考にするが、非親族の場合は会話頻度による違いはあまりないことがわかる。非親族の場合は、そもそも自分の選んだ相手であるため、仮に会話頻度が低くても参考にしようとする者が多いのだろう。逆に、本人の意思に関わらず関係が続く非選択的關係（石田 2006）である親族の場合、そこから自分の選んだ相手を参考にするのではないかと考えられる。

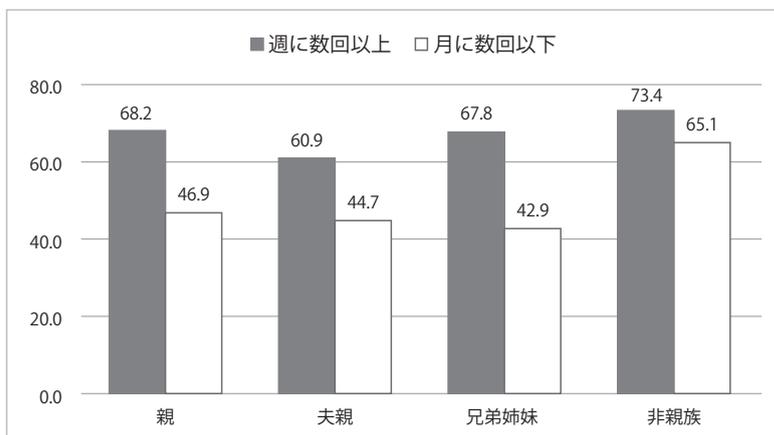


図7 会話頻度と参考にする割合の関連

この点を詳しく検討するため、親族に限って、支援の授受状況による違いを調べた。具体的には、「子どもの面倒をみてくれる」「あなたを金銭的に援助してくれる」「喜びや悲しみを分かち合える」「あなたが金銭的に援助している」「あなたが介助や介護をしている」という5項目への回答別に、参考にする割合を集計した。結果は図8の通りで、いずれかの面で支援してくれる相手のことほど、また、自分が支援する必要のない相手<sup>11)</sup>のことほど参考にすることがわかる。

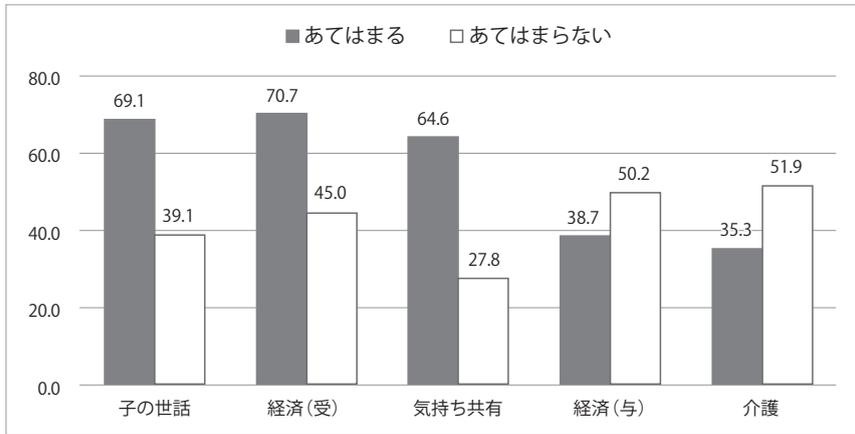


図8 支援の授受状況と参考にする割合の関連（親族のみ）

では、参考にするのは、相手の考え方なのだろうか、それとも相手の地位や暮らし向きなのだろうか。図9は、「考え方」と「属性（学歴・職業・暮らし向きの少なくともいずれか1つ）」をそれぞれ参考にするか否かについて、相手との続柄別に集計した結果になる。ここから、親族の場合は、「考え方」と「属性」を同程度に参考にしていること、その傾向は「親」「夫親」「兄弟姉妹」のいずれも同様であることがわかる。相手の「考え方」だけでなく、学歴・職業・暮らし向きなど、社会的な地位や生活の様子も参考にしているというのは興味深い。一方、非親族の場合は、特に「考え方」を参考にしているのが特徴的である。ただし、「属性」も親以外の親族と同程度に参考にしている。

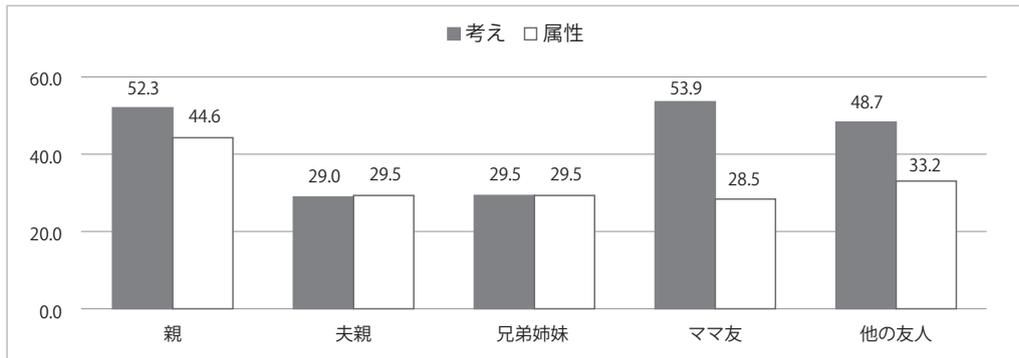


図9 参考にする内容

前節では、相談面で非親族が頼りにされていることを明らかにしたが、子どもの進路を考える際の準拠枠としても、非親族の考え方が重要視されているというのは大変に興味深い結果だと言えるだろう。

## 6. まとめと今後の課題

本稿では、子育て環境のコーディネイターである母親に対して、パーソナルネットワークが果たす役割を検討してきた。従来から着目されてきたサポート機能だけでなく、母親の側がメンバーを参照する側面を取り上げたのが新たな試みであった。

サポート機能の側面については、以下の知見が得られた。1) 人手や経済面の支援は主に親族によってもたらされる。2) 相談相手としては非親族が重要な役割を果たしており、一部ではメディアも利用されている。3) 非親族(相談相手)と公的機関(相談相手と経済的支援)に対して相対的に強い支援ニーズがある。

NFRJデータを用いたサポートネットワーク研究では、サポート源としての親族の重要性が近年ほど高まっていると指摘されている(西村・松井 2016; 大日・菅野 2016)。本稿でも、人手や経済の面では、確かに親族の重要性が明確に示された。ただし、相談面では非親族が頼りにされており、しかも既に多くの者が非親族に相談している実態があるにもかかわらず、非親族へのさらなる相談ニーズが高かった。この点について、大日・菅野(2016)らの分析結果を詳しく見ると、女性の場合には「友人・同僚」に「相談」する割合が高く、しかもその傾向が時代とともに強まっていることが確認できる。

一方、参照機能については、以下のことが明らかになった。4) 居住距離に近い者を参考にするわけではい(非親族の場合むしろ遠くに住む者を参考にしている)。5) 非選択的關係である親族の場合は、よく話す相手や自分を何らかの面で支援してくれる相手を参考にする(逆に、自分が支援する必要のある相手はあまり参考にしない)。6) そもそも選択的關係である非親族の場合は、相手との関係性にかかわらず参考にする。7) 親族の場合は相手の考え方や属性を同様に参考にするが、非親族の場合は特に考え方を参考にする。

なお、以上の結果は、都市部の1地域を対象とした調査データから得られた結果に過ぎない点は改めて指摘しておく必要があるだろう。今後、他の地域も含めたより適切なデータを用いて、検証していくことが求められる。

ところで、従来の子育てに関するネットワーク研究は、「育児期」の母親に対するサポート機能に焦点をあててきた。幼い子どもの「育児」には手間もかかり親の不安も大きいため、サポートの必要性が注目を集めやすかったのだろう。それは、女性の就労や性別役割分業との関連からも、鍵となるテーマなのだと理解できる。しかし、子育て環境とパーソナルネットワークとの関連は、育児に手がかからなくなったら終わりというわけではない。とにかく健康に育ってくれることが重要であった乳幼児期を過ぎれば、どのように「教育」していくかが次第に重要になってくるからだ。子どもの成長とともに人手のサポートを必要としなくなったとしても、各時期の発達課題に対して「相談相手」や「準拠枠」へのニーズが生じ、しかもそれらの重要性は子どもの成長とともに次第に高まってくるとも考えられる。そうしてみると、ネットワークのサポート機能だけでなく、コーディネイターとしての親がネットワークを準拠枠とする面についても、今後一層の研究が求められるように思われる。

注

- (1) 松田(2008)のまとめによれば、新中間層が少数派に過ぎなかった昭和初期には家事使用人が、キョウダイ数の多かった戦後の高度成長期までは自分のキョウダイが、キョウダイ数が減少してからの現代社会では、自分と同じ年頃の子どもを持つ子育て仲間が、それぞれ母親の育児をサポートしてきたという。ただし、サポートが必ずしも十分でないことは松田も指摘している。後に引用する星(2011)も、誰にも頼れない者が3割ほど存在することや、特に都市部に孤立する者が多いことを問題視し、サポートの必要性を訴えている。
- (2) 「修正拡大家族論」とは、産業化・官僚制化の進んだ現代社会において、核家族は構造的には孤立しているものの、親族との紐帯は重要性を維持し続けているとする主張を指す。
- (3) ただし、大和(2000)の発見は、従来のネットワーク研究が着目してきた「交際のネットワーク」の場合とは異なり、「ケアのネットワーク」では、男性の場合、階層が高いほど多様性が低い(妻と子ともに限定されがち)ことを指摘した点にある。
- (4) 第3次調査では143件の回答が得られたものの、回答に不備のあるケースがあったため有効回答は139件であった。そのため第2次調査と合わせて193件を用いて分析を行った。
- (5) どちらも第1次調査への回答者を対象としている点でバイアスがかかっている。特に、第2次調査の対象者は、その中でもインタビューへの協力要請に応じた方であり、調査への協力意思がより一層強い方たちであると言える。
- (6) 非親族によるサポート状況について、調査モードによる違いを検討したところ統計的に有意な差は認められなかった。ただし、有意差はなかったが、第2次調査では子どもの世話への支援が少ない傾向にあった。予め選択肢を用意していなかったことが影響した可能性がある。
- (7) 「家事支援」の傾向は、支援を受けている比率が全体に低いものの、推移の傾向は「子どもの世話」の場合とほぼ同様であった。
- (8) なお、2つの調査で回答傾向に違いがないかを確認したところ、非親族に「友達関係や学校」について相談する傾向のみ、調査による違いが統計的に有意であった。具体的には、第2次調査では非親族に相談する割合が91%であったのに対し、第3次調査では77%に留まった。第2次調査の回答者の方が非親族ネットワークに恵まれていた可能性がある。ただし、後述するような分布の基本的な関連構造には大きな違いがあるわけではない。
- (9) 基本的に回答をそのまま入力した結果を載せているが、意味の通りにくい箇所や明らかな誤字と思われる部分には若干の修正を加えている。
- (10) 落合(1989)では、悩みの筆頭に「祖父母の干渉」が挙げられていたが、本調査ではむしろ夫の無理解に言及する例が多く、親への不満は限られていた。地域や対象(落合は2歳児の母)の違いが関係している面もあるだろうが、この30年ほどの間に、親の口出しを抑制させる規範が広がった(逆に、夫への期待が高まった)可能性も考えられる。
- (11) 調査では支援したかどうかという事実をたずねただけであり、厳密にはこれが支援の必要性を意味するのかわからない。そのため「支援したいと思わないような相手(関係性がよくない相手)」である可能性も考えられる。しかし、一般に、支援したくない相手を参考にしようとは思わないと予想されるため、ここでは「支援する必要がない相手(健康であったり、経済的にも困っていないような相手)」だと解釈している。

引用文献

- 荒牧草平, 2018a, 「母親の高学歴志向の形成に対するパーソナルネットワークの影響: 家族内外のネットワークに着目して」『家族社会学研究』30(1): 85-97.
- 荒牧草平, 2018b, 「母親の人づきあいと教育態度: 家族内外のパーソナルネットワークに着目して」『日本女子大学紀要 人間社会学部』28: 35-45.
- Bott, Elizabeth, 1955, "Urban Families: Conjugal Roles and Social Networks," *Human Relations*, 8: 345-384 (=2006 野沢慎司訳「都市の家族—夫婦役割と社会的ネットワーク—」野沢慎司監訳『リーディングス・ネットワーク論』勁草書房: 35-91).
- 大日義晴・菅野剛, 2016, 「ネットワークの構造とその変化: 「家族的関係」への依存の高まりとその意味」稲葉昭英・保田時男・田渕六郎・田中重人編『日本の家族 1999-2009: 全国家族調査[NFRJ]による計量

- 社会学』東京大学出版会：69-90.
- 星 敦士, 2011,「育児期のサポートネットワークに対する階層的地位の影響」『人口問題研究』67(1): 38-58.
- 石田光規, 2006,「選べる関係、選べない関係：パーソナルネットワーク・アプローチの再考」『社会学論考』27: 21-36.
- 久保桂子, 2001,「働く母親の個人ネットワークからの子育て支援」『日本家政学会誌』52(2): 135-145.
- Litwak, Eugene, 1960, “Geographic Mobility and Extended Family Cohesion,” *American Sociological Review*, 25(3): 385-394.
- 前田尚子, 2004,「パーソナル・ネットワークの構造がサポートとストレインに及ぼす効果：育児期女性の場」『家族社会学研究』16(1): 21-31.
- 前田尚子, 2008,「地方都市に住む育児期女性のパーソナル・ネットワーク」『家庭教育研究所紀要』30: 5-13.
- 松田茂樹, 2008,『何が育児を支えるか：中庸なネットワークの強さ』勁草書房.
- 目黒依子, 1980,「社会的ネットワーク」望月嵩・本村汎『現代家族の危機』有斐閣, 78-100.
- 目黒依子, 1988,「家族と社会的ネットワーク」正岡寛司・望月嵩『現代家族論』有斐閣, 191-218.
- 西村純子・松井真一, 2016,「育児期の女性の就業とサポート関係」稲葉昭英・保田時男・田淵六郎・田中重人編『日本の家族 1999-2009：全国家族調査[NFRJ]による計量社会学』東京大学出版会：163-186.
- 野沢慎司, 1995,「パーソナル・ネットワークのなかの夫婦関係」松本康編『増殖するネットワーク』勁草書房：175-234.
- 落合恵美子, 1989,「現代家族の育児ネットワーク」『近代家族とフェミニズム』勁草書房：93-135.
- 大谷信介, 1995,『現代都市住民のパーソナル・ネットワーク』ミネルヴァ書房.
- 渡辺秀樹, 1994,「現代の親子関係の社会学的分析：育児社会論序説」社会保障研究所変『現代家族と社会保障』東京大学出版会：71-88.
- 大和礼子, 2000,「“社会階層と社会的ネットワーク”再考：〈交際のネットワーク〉と〈ケアのネットワーク〉の比較から」『社会学評論』51: 235-250.